

2013年4月(春号)

やどかりの里発! 地域発見マガジン

大宮見沼

よみさんぼ

第5号

特集

見沼の農を支える



編集 公益社団法人やどかりの里「大宮見沼よみさんぼ」編集委員会

特集

見沼の農を支える

インタビュー

見沼の主 伝統の農業者

浅子 和宏さんに聞く



浅子 和宏さん

浅子和宏さんは、やどかりの里が運営する「やどかり情報館」のお隣さんだ。やどかり情報館は印刷、出版などの事業を始め、思い出の里（さいたま市営霊園）の植栽管理事業を周辺の障害者施設の仲間たちと行っている。浅子さんは、やどかり情報館開設時には近隣の方との橋渡し役を担い、やどかり情報館の応援団のお1人だ。今回は、浅子さんに見沼田んぼで長年続けられてきた農業について伺った。

—浅子って珍しいお名前ですね。

墓を見ると江戸時代初期にさかのぼることができます。祖先は代々庄屋で、名前も庄五郎とか、庄作とか庄の字がついています。浅子って姓は、赤穂藩の浅野内匠頭の「浅」に由来します。ちなみに家紋も同じです。浅子の一族郎党は12月14日の赤穂浪士の討ち入りの日に集まっていたそうです。

—小さい頃は、戦後の混乱の中でご苦労されたそうですね。

私は1943（昭和18）年生まれですが、親父の顔を知りません。通信兵として戦地に赴いた親父は、1945（昭和20）年5月にフィリピンでマラリアに罹り死



にました。4～5年経ってからの通知でした。親父は地元で青年団長なども務めていて、この地でよく知られていたようです。出兵前に、「遺書」が書き残されており、当時の村長さんが、「こんな立派な遺言状を見たのは初めて」と言われたのが印象に残っております。親父を失った戦後の混乱期には、農地を売ってお金に換えるなどして、私が1959（昭和34）年に学校を卒業するまでは、家庭のこともあり苦勞の連続でした。

一その苦難の時に農業をどうやって続けてこられたのですか？

親父もそうですが、爺さんも染谷の部落会長をするなど、地域では面倒見がよくて知られた人だったため、周りの人が何かと教えてくれて、田植えや稲刈りの時には最寄ってくれるなど、互助関係がありました。それがあって何とかやっていくことができました。

一その後は、どうやって農業を拡大し今日につなげてきたのですか？

妻は勤めに出ておりましたので、私とお婆さん（母親）の2人で耕作地を借りるなどして、規模を大きくすると同時に、機械も積極的に増やしていきました。それに、農協にはあまり頼らずに、生協と組むなどして産直に取り組んだのも早かったと思います。今は、農業法人化して年に何億という売り上げまで行きました。

一土日の片柳のコミュニティセンターの直売所では、浅子さんのトマトがいちばんおいしいので早くなくなると評判ですね。

それは、私がつ作っている堆肥が違うからです。琉球大学の比嘉照夫さんが開発した有用微生物群（EM）を使った農法、つまり自然界の生ゴミを分解させる菌を使って堆肥を作り、それを土壤のベースとして使っているからです。米ぬか、魚粉、油かすなどを入れて発酵させ、攪拌して堆肥を作ります。この堆肥を使った土壤づくりには、5年から10年かかります。その土壤の上に、相性のい

写真 P2 評判のトマトの栽培ハウス

3

写真 P3 左 ジャがいもの作付の様子

右 行列のできる染谷農産物直売所

い化学肥料を使っていますが、追加投入は通常の半分ぐらいで済みます。

世の中に有機農業を標榜している農家は多いのですが、無機質と有機質の2つの化学肥料のうち、有機質のものを半分以上使っていれば、有機栽培と名乗ることができます。そのような農法とはまったく違います。結局、安く作って旨いものができるわけがないのです。私のこの農法は面倒臭いので、地域の人あまりやりたがりませんが、最後は消費者が決めてくれます。例えば、私のところのトマトは日持ちがいいのですが、普通は3日もすればぶよぶよになります。そうなる消費者は買ってくれないから売れ残る、安く作っても儲からないという悪循環になるんですね。

ー日本の農業に、なぜ浅子さんのような農家が増えなかったのでしょうか。

20～30年ぐらい前までは、農家同士が教え合ったり助けたりといった関係が、農業を底から支えていたのですが、国が進めた「減反政策」の影響が大きかったですね。これで、お互いに支え合う関係が希薄になり、農業者の意欲が落ちてバラバラになっていきました。海外に日本製品をたくさん輸出するため、バーターとして、外国からの安い大豆とか小麦の輸入を促進するためにとられたのが減反政策でした。

ー浅さんは、農業をテコにして地域のネットワークづくりにも熱心に関わっているそうですね。

はい。30年ほど前から、子どもたちに田植えや稲刈りを体験してもらって作文を書いてもらい、「おひまち」という収穫祭を毎年10月1日にやっています。そこでお餅とかおはぎを配っています。また、近くの神社の掃除は、氏子を代表してもう8年間もやっています。さらに、見沼区の文化祭（今年は2月16日、17日）では、酒粕を10キロほど買ってきて大きな鍋で甘酒を無料提供し、地域の皆さんに喜んでもらっています。

ー浅さんからみて、結局、農業っていうのは何でしょうか。

人間が生きていくための「源」、それが農業だと思うんです。何ととっても、農業が作り出す食がなければ人は死んでしまいます。この意味で農業は強い存在です。また、農耕文化＝日本文化といってもいいほどだし、環境問題にも

大いに関係します。農業者はもっと誇りを持つべきだと思います。そのため、もっと技術と意欲を高めて、美味しい作物をお客さんに提供していかねばなりません。採算が合うこと、儲けることばかりを農業に求めているは駄目ですね。

—最後に、やどかりの里との関わりで何かお考えはありますか。

メンバー（やどかりの里の利用者）の中にも、農業を手伝って欲しいような人が結構います。また、これから増える退職世代にも、農業に興味を持つ人が出てきました。こうした人々を農業へと結び合わせることで、何か世の中に貢献できることがあるのではないかと、それがこれからの私の使命ではないかと思っております。是非、何とか実を結びたいですね。

インタビューを終えて

江戸時代から脈々と続く浅子さんの家系と農業。その歴史には、地域社会との紐帯を背景としながら、独自に工夫を重ねた農業技術と自立した販売網の構築がありました。そしてとりわけ印象深いのは、収穫祭や文化祭を通じて、地元の人々に農業を身近に感じ、親んでもらえる場を作っていることでした。

（インタビューアール 花岡 進）

安くて美味しいお野菜を求めて、あなたも足を運んでみませんか？

染谷農産物直売所

見沼区染谷にある片柳コミュニティセンター内は、毎週土・日に染谷農産物直売所として多くの人で賑わう。11世帯の近隣農家が協働で、米や野菜、果物、花などの直売を行っている。営業時間前からレジの前には長蛇の列。1日で400人以上もの人が訪れるという。浅子和宏さんはこの直売所の代表を務める。

見沼区染谷3-147-1

（片柳コミュニティセンター内）

営業時間 土日 9:15～16:00

TEL 048-684-2435



よみさんぽ日誌

障害のある人とともに、見沼田んぼの保全活動を担う見沼田んぼ福祉農園。そして今やその栽培技術で世界を股に掛ける、黒田洋蘭園。見沼の地への誇りを抱きつつ活動を続ける方々に、お話を伺いました。

農を通じて共生社会の実現を

猪瀬 良一さん（見沼田んぼ福祉農園代表）

さいたま市緑区、加田屋川沿いに位置する見沼田んぼ福祉農園。第1～第3とある農園は、併せて1ha弱の広さを有する。さいたま新都心のビル群を背に広がる農園に、都市と農の不思議な一体感を感じつつ、代表の猪瀬良一さんを訪ねた。

見沼田んぼが広がり、自然に囲まれた地に惹かれた猪瀬さん。自閉症である長男が「地域の中で生きる」ことを望み、また農業のもつ力に着目して、28年前に障害のある人が農業に携わる、福祉農園構想を描いた。その構想が結実したのが1999（平成11）年。県の見沼田圃公有地化事業の一環として、県と管理運営委託契約を結び、公有地の一角を活用した見沼田んぼ福祉農園が開園した。近隣のデイケア施設やボランティア組織が運営に関わり、現在福祉農園では、知的障害や身体障害、精神障害のある仲間たち、ボランティアの高齢者や若者、子どもたち、近隣農家の協力者など、多くの人が力を合わせ農業活動を行っている。今でこそ耕された土地ではねぎやキャベツなどいろんな作物が作られているが、開園前、そこは廃棄物が投棄され、雑草が繁茂する荒地だったそうだ。当時まったくの農業素人であったスタッフらとともに、近隣農家の人たちから農業のノウハウを教わったという。

「障害の有無に関わらず、誰もがともに地域で生きる。そんな共生社会を目指して、農作業をしています。今後も公益性を維持しながら、活動を続けていきたいと思います」と猪瀬さん。

地域の多様な人たちが集い、農地保全を行う活動の源には、「誰もがともに地域で生きる」、そんな共生社会を目指す思いがあった。（記 萩崎 千鶴）

見沼の地から世界の市場へ

黒白 秀之さん（黒白洋蘭園）

黒白洋蘭園は見沼区染谷にあり、胡蝶蘭の栽培、販売で有名な会社だ。代表取締役の黒白秀之さんは、もともと見沼の農家だった家業を22歳から引き継ぎ、洋蘭栽培、販売会社へと事業展開させた。

洋蘭栽培はバイオ技術を使って、クローンとして培養していくため、栽培には手間がかかり、極めて難しい技術を要するそうだ。黒白さんは17～8年前から、培養した種苗を温かい気候の台湾で育て、その後日本で開花させるビジネスモデルを確立させ、現在では年間30万株を販売している。グローバルな事業展開の中で、顔の見える信頼関係を外国の企業と地道に築き、事業を成功へと導いたのは、黒白さんの先見性と仕事に対する誠実な姿勢がなせるわざなのだろう。そして、2009（平成21）年には第12回全国農業担い手サミット in 埼玉大会に先立ち皇太子殿下が黒白洋蘭園を視察に訪れ、2010（平成22）年の第59回農業コンクールで農林水産大臣賞を受賞している。

胡蝶蘭は日本人にとっては、高価で特別な思いを伝える贈り物だが、諸外国では安価で大量生産されているという。黒白さんは日本の胡蝶蘭は大量生産品とは比べ物にならない品質を持っているので、「特別な贈り物」としての文化や気持ちも含めて、海外に販売していくことを目指したいという。

一方で、この見沼の地をとっても大事にしている、見沼田んぼが耕作放棄地になってしまうのではないかと、見沼田んぼの土地、自然を生かしていくことはできないかと、地域の問題にも大きな関心をもっている。

見沼の地から世界の市場に出て行く黒白洋蘭園の胡蝶蘭は、日本のおもてなし文化とものづくりの精緻を伝える役割を担って、世界に進出していくに違いない。そしてそれは同じ見沼の地で活動する私たちにとっても大きな誇りだ。

（記 野田 妙子）

黒白洋蘭園 埼玉県さいたま市見沼区染谷 1-188 / TEL 048-683-6727

やどかりの里の仲間たち・4

大好きな絵を描きながら

斉藤 元さん (44歳)

エンジュで働き始めて2年になります。主に、厨房の仕込みを担当しています。エンジュで働くようになって仕事が大事だと思うようになり、生活も仕事中心に考えて、早く寝て準備するようになりました。

絵が得意で、小学校5年生の時に埼玉県知事賞をもらいました。絵は休みの日や、早く起きてしまった朝などに描いています。きょうされん(全国の障害者施設によって組織される団体)の「はたらく仲間のうた」カレンダー(障害のある人たちが描く作品を使って制作される)に応募し、1,634点の作品の中から入賞の70点に選ばれました。残念ながら入選できなかったのですが、カレンダーには採用になりませんでした。でも絵は友人やエンジュの仲間にあげたりして喜んでもらえると、それだけでうれしいです。これからも、がんばってエンジュで働き、絵も描いていきたいです。

一人前を目指して

星 俊光さん (44歳)

やどかり情報館の印刷部門で働き始め、5月で2年になります。名刺や封筒、年賀状、機関紙などの印刷から、製本作業も担っています。

情報館で働き始めた頃は、不安との戦いでした。仕事の先読みをし過ぎて「自分にやれるかなあ」という思いがあったんです。でも先輩スタッフの「失敗しながら覚えていけばいいんだよ」という言葉や、病気のことをわかち合える同僚の存在に助けられ、ゆとりをもって働けるようになりました。趣味の読書を通じて得た考え方も支えになっています。

今では、失敗も自分の財産、成功へのステップだと思えるようになりました。

これからも、私のスタイルである「カメのようにこつこつ」と働いて経験を重ね、一人前の印刷オペレーターになっていきたいです。

参道マップ

～氷川参道をぶらり散策～



旧中山道から武蔵一宮
氷川神社までをつなぐ
氷川参道. このコー
ナーでは氷川参道を散
策して出会った大宮の
魅力をご紹介します.

今回は、氷川神社の周辺を散策しました。氷川神社の北側に広がる大宮公園。大宮区の区の花は「桜」。区内にはたくさんの桜の名所がありますが、大宮公園もその1つ。取材した時には桜はまだでしたが、梅の花が咲いていました。歴史ある木々の凛とした佇まいに清々しい気分を味わえます。また、大宮公園や見沼田んぼの周辺は、緑豊かなまちづくりを目的とした都市計画法に定める風致地区（都市内外の自然美を維持、保存することを目的に、建設物の建築や樹木の伐採など一定の制限が加えられる地区）に指定されており、自然豊かな風景が楽しめます。公園の東沿いにはサッカークラブ大宮アルディージャのホームグラウンドがあり、ここにも新旧の混在する景色がありました。

参道沿いにふと目にとまった竹林。その爽やかな風情に誘われて中に入ってみると、そこは「氷川の杜文化館」というさいたま市の施設でした。能楽、日本舞踊、三曲（琴、三味線、尺八）、茶道、華道などの伝統文化の活動拠点となる文化交流施設とのこと。歴史や文化の発祥の地となったこの地に立地しているのもうなずけます。氷川神社の境内に能舞台を特設して開催される「大宮薪能」は、1982（昭和57）年の東北・上越新幹線の開業を記念して始まりました。その最高のロケーションと一流の演者により、高い評価を受けているということも教えていただきました。



歴史や文化に触れた今回の取材。そしてそれを大切に守っている人たちの姿がしっかりと感じられました。

（記 堤 若菜）

あなたの街のやどかりさん

やどかりの里コンサート

伝えたい やどかりの里が目指すこと

資金獲得のためのコンサート

「精神障害があっても街の中で自分らしく暮らしたい」

やどかりの里は、そんな願いを叶えるため、1970年（昭和45年）に、精神障害のある人の地域生活を支える活動を始めました。初めは、3人しかいなかったメンバー（やどかりの里では、やどかりの里を利用している人のことを総称し、メンバーといいます）も、現在では300人を超えました。さいたま市見沼区中川に法人本部をおき、見沼区・大宮区・浦和区・中央区に住む場・憩う場・働く場などを点在させて、精神障害のある人の暮らしを支えています。

やどかりの里が活動を始めた頃、精神障害のある人の地域生活を支援する福祉制度はなく、やどかりの里の活動に対する公的な補助金はありませんでした。必要な活動を維持するための費用は、自分たちの手で獲得していくしかなかったのです。資金獲得のために活動開始当初から行ってきたのが、バザー（よみさんぽ第2号参照）やコンサートでした。過去には、雪村いずみさんや和太鼓の鬼太鼓座などのコンサートを開催しました。やどかりの里の活動は、コンサートにご来場いただくことを通して、多くの人に支えられてきたのです。

「いのち」をテーマに

2003年（平成15年）から、やどかりの里のコンサートは「いのち」「生きること」をテーマに開催しています。そのきっかけは、作曲家の中村雪武さん（12～13ページで紹介）との出会いでした。

今年も11月29日（金）、埼玉会館大ホール（浦和）で「チェコ少女合唱団『イトロ』ツアー・フォー・ピース2013さいたま公演～きっと かならず はなは咲く～」を開催します。「イトロ」のコンサートは2007（平成19）年、2010（平成22）年に続き、3回目となります。「イトロ」の少女たちは、世界でも名高い芸術性を

第5回

やどかりの里では、地域の中で必要な働く場や住まいなどをつくるための資金づくり、地域の皆さまとの交流を目標に、コンサートを開催しています。

発揮し、いのちと平和の尊さを私たちに語りかけてくれます。

2011(平成23)年3月11日に発生した東日本大震災では、多くのいのちが犠牲になりました。障害のある人の被害は、障害のない人の2倍に及ぶ、というデータが出されていることをご存知でしょうか。その中には、津波の情報を得ることや自力で避難できなかつた人などが含まれています。1人でも多くの障害のある人が、地域の人と結ばれていたら……そんな思いが頭をよぎります。私たちの暮らすさいたま市でも他人事ではありません。地域の絆を育む機会となることを願いつつ、今回はどんなコンサートにしていけるか、期待に胸を膨らませながら、企画中です。

「音を楽しむ」

「イトロ」の少女たちの表現力と歌声は、聴く人にぐっと迫り、心を揺さぶります。実力はもちろんですが、聴いているうちに自然と惹きつけられていく感じ、……まさしく、「音を楽しむ」音楽の力なのでしょう。

今回、本誌よみさんぽを通じた出会いをきっかけに、やどかりの里もいよいよ文化活動を本格化?!コーラス隊を結成し、いろいろな場で発表していきたいと考えています。大きな声を出して、歌を歌う……そのことが私たちの楽しみの1つになっています。皆さんにも聴いていただける時が来るかしら?!今年のコンサートにお越しいただければ、私たちの歌声を披露できるかもしれません……

「イトロ・ツアー・フォー・ピース2013」コンサート、乞う、ご期待!

(記 宗野 文)

チェコ少女合唱団「イトロ」ツアー・フォー・ピース2013さいたま公演

～きつと かならず はなは咲く～ 11月29日(金)／埼玉会館大ホールにて開催

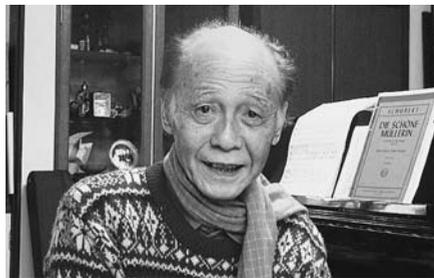
人とのつながりを大切に

中村 雪武さん

中村雪武さんは、作曲活動の傍ら、ギター、ピアノ、バイオリン等の音楽教室を主催されています。やどかりの里が活動資金獲得のために行ってきたコンサートに新しい風を吹き込んでくれた人です。改めてお話を聴きにご自宅にお邪魔しました。

音楽と私

私の学生時代は、学生運動の真っ只中。ほとんど授業に出ないで、好きだったクラシックギターにのめりこみ、あちこちで演奏して収入を得る生活をしていました。当時、大卒初任給が2万円という時代に、6万円稼いでいたんですよ。音楽で食べていけるなら……と、音楽家の道を選んだんです。学生運動の最前線にいた友人の影響でしょうか、私も音楽という表現手段を用いて社会に働きかけていきたいという思いがありました。その後、会社勤めしている



友人たちは、徐々に収入をあげていきましたが、私はいつまで経っても6万円。すぐに追いつき越されました。失敗したなあ……と思いましたね。でも、何かにつけて反体制的な思考をする私に会社勤めは無理だっただろうと思います。

やどかりの里との出会い

やどかりの里との出会いは、私の母がエンジュ（障害のある人が働く宅配弁当屋）のお弁当を利用していたことがきっかけでした。やどかりの里のメンバーや職員が母に弁当を配達してくれるのを目にしながら、私が音楽を通して社会に働きかけようとしているように、やどかりの里は弁当を通して社会に働きかけているんだろうなあと思っていたんです。ある日、職員の女性に、自分のなりわい生業を生かして、やどかりの里の活動に協力したいと申し出ました。被爆体験の語り部で、詩人の橋爪文さ

んの詩をもとにした歌曲「夏の響き」でコンサートをしなかと提案したわけです。私は自分とやどかりの里の活動の根っこは同じだと思っていたので、やりとりを重ねていっしょにコンサートをやることが決まりました。2002（平成14）年のことです。

コンサートを通して

同年（2002年）、私の故郷、熊本で開催した「夏の響き」コンサートに、やどかりの里の職員が来てくれました。熊本のコンサートは、私の小・中・高の同窓生たちが実行委員となって企画してくれていたんですが、コンサートが成功裏に終わり、打ち上げに参加したやどかりの里の男性職員が、「感動した」と号泣するんです。その姿が印象的でした。自分と同じ目線でモノを見る人たちだと感じ、私の提案は間違っていなかったと嬉しく思いました。

やどかりの里と共同で企画したコンサートの準備が始まって、実行委員会に参加するようになると、驚かされました。やどかりの里の話し合いは、参加している1人1人の意見をしっかり出し合い、話し合いながら、全員が納得できるように決めていくんです。とても時間がかかるんですが、そういうことを大切にでき

る組織であることに感動しました。

やどかりの里への思い

やどかりの里の人と関わる時、「やどかりの里の人」ではなく、「やどかりの里の〇〇さん」というふうに、その人の名前と顔がしっかりと浮かんでくるんです。個性のある1人1人が認められ、大切にされているんだろうなあと思います。そういうところは、今の社会の中で少なくなっているように思いますから、これからも大切にして欲しいですね。

インタビューを終えて

私が、雪武さんと初めてお会いしたのは、熊本での「夏の響き」コンサートでした。同窓生の皆さんに囲まれる雪武さんの姿に、こんなにもご友人に愛される雪武さん、なんて素敵なお人だろうと感動したことが思い出されます。今回お話を聞かせていただき、改めて、雪武さんの生き方の軸が、人とのつながりにあることを感じました。

「夏の響き」コンサートの次にご提案いただいたチェコ少女合唱団のコンサートは、今年11月29日（金）に3回目を予定しています。是非多くの皆さまにご来場いただきたいと思います。乞うご期待！（記 宗野 文）



あなたの街のイベントやお祭りに呼んでください！出張します！

<http://www.yadokarinosato.org/>
 谷藤 益人 やどかりの里 (さいたま市見沼区染谷 1177-4 やどかり情報誌)
 Phone. 048-680-1893 Fax.048-680-1894
 e-mail : print@yadokarinosato.org

労働保険・社会保険の手続き、ご相談は
浅沼社会保険労務士事務所

社会保険労務士 浅沼 智

〒353-0001 志木市上宗岡 4-26-15
 電話 048-487-6161 FAX 048-487-6168
 E-mail:skiki-asanuma@sand.ocn.ne.jp

○OA機器
 事務機器
 オフィス用品
 ソフトウェア のことなら

主な取扱商品
 印刷機・複合機・FAX・事務用品・幼稚園ソフト

地域に根付いて36年
 **教育産業株式会社**
<http://www.kyouikusangyou.co.jp>

さいたま市見沼区南中野301-1 TEL:048-685-0855
 FAX:048-685-0726



営業時間 月～土 10.00-17.00
 さいたま市大宮区天沼町 1-136-2

募集

- ☆作品展示したい方
- ☆雑貨販売したい方
- ☆貸しスペースあります

詳細は ☎ 048-657-0202

天沼1丁目
 大宮駅
 スーパーバリュー
 ○大宮天沼店
 喫茶ルポース

埼玉県産小麦粉を使用 **手づくりまんじゅう**

まごころ

さいたま市中央区本町東 5-9-7
 Tel. 048-857-2783 Fax. 048-857-2769



こころの悩み、ちょっと話してみませんか…？



お住まいの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい

見沼区障害者生活支援センターやどかり	電話 ; 048-682-1101
大宮区障害者生活支援センターやどかり	電話 ; 048-795-4720
浦和区障害者生活支援センターやどかり	電話 ; 048-793-6373



～ 精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です～



エプロン



学校グッズ



防災ずきん

布製品をオーダーメイド製作いたします！

お気軽にご相談ください。

1Fリサイクルショップ「すてあーず」営業中！

Tel/687-4483 (直)



公益社団法人 やどかりの里

すてあーず

南中野 844-22 イエローハウス

Tel/688-8223

おいしく食べて
健やかに

栄養バランスのとれた
お弁当で食生活を充実させます



昼食 1食 550円

月～金、1食からお届けします！

※おかゆや刻み食も対応します

※ご希望の曜日にお届けします

エンジュ TEL686-7875

<受付> 月～金 (祝日を除く) 8:30～18:00

新刊案内

やどかりブックレット・障害者からのメッセージ・21

私が選んだ働き方
企業就労した人たちの経験

やどかりブックレット編集委員会 編
阪井 宏一 野口 智子 他 著
2013年1月
定価 840円
やどかり出版



事務用封筒・名刺・軽オフ印刷のことなら

あなたの街の印刷屋さん

やどかり印刷

Tel 048-680-1893 Fax 048-680-1894

さいたま市見沼区染谷 1177-4

作者紹介

表紙絵 大塚幸子さん さいたま市大宮区三橋在住。1992年陶芸倶楽部開催、2009年絵手紙倶楽部開催、現在に至る。表紙絵のことは「梅を追って桜咲き、春から夏へと、毎年同じ場所で同じ様に咲く花々たちに、未来ということばを教えられます。どなた様にも、すてきな未来でありますようお願いしております」

題字 イラスト 宗野文さん (1975年生まれ) 学生時代から書道が大好きで、子育て中の今我が子とともに習字に再挑戦中。やどかりの里の作業所「すてあーず」所長。見沼区南中丸在住。

大宮見沼よみさんぽ 第5号

発行 2013年4月(春号)

編集 「大宮見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里
理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

定価 100円

求めています

* 300坪～600坪の農地

やどかりの里では、障害のある人たちとともに担う農業を考えています。見沼区染谷地域を中心に、土地を所有している方で「高齢で農業が難しい」「遊ばせている土地を貸したい」とお考えの方がいらっしゃいましたら、ぜひご連絡ください。
やどかり情報館 TEL 048-680-1893 (担当 宗野政美)

* 100坪～の事務所付倉庫

大宮区天沼にある事業所「あゆみ舎」では、企業からの下請け作業やメール便配達を行っています。業務の拡大に伴い、大宮区、見沼区周辺への移転を検討中です。移転先の物件を探しておりますので、情報をおもちの方はあゆみ舎までご連絡ください。
あゆみ舎 TEL 048-648-2555 (担当 堤若菜)